

---

# SCHOOL・GAME

カワニシ美玲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SCHOOL・GAME

### 【Nコード】

N3728BA

### 【作者名】

カワニシ美玲

### 【あらすじ】

「今から皆さんにはですね。SCHOOL・GAMEという名の殺し合いゲームを、現実でやってもらいます！」

ある日突然、坂崎二千翔の通う高校。そこがゲームの舞台になっていた。ルールは簡単、決められた制限時間内にクラスメート全員で殺し合いをするだけ。……人を一人殺すことに、その殺した人間には百万という大金が手渡される。果たして二千翔はこの地獄のゲームを、大切な仲間と共に生き残ることが出来るのか！そして究極の選択……人は『金』と『人の命』の、一体どちらを取るのか！？

## プロローグ 〱 GAMEの参加者達〱（前書き）

この物語には一部、残酷なシーンが含まれていますので、そういった類の苦手な方は読むのをお控えください。

それでも大丈夫という方はどうぞ！（・・）

## プロローグ　GAMEの参加者達

とある×月×日の水曜日。

俺、坂崎二千翔は全速力で家を飛び出してた。ジャムが適当に塗りたくられたトーストを右手、教科書が乱雑に押し込まれた学生鞆がくせいのかばんを左手に。

短髪な髪型のおかげで朝っぱらから鏡の前で格闘することもなく、余裕綽々《よゆうしゃくしゃく》とテレビを見ていたのがいけなかった。自分の通う高校は朝の朝礼が九時から始まるのだが、まあ今の時刻はきっかり九時というわけだ。……遅刻である。

家から学校までの距離は、近くもなく遠くもない微妙なところに位置しているため自分は今、大慌てで走っているのである。右手に持っていたトーストを一口に頬張り、勢いよく咀嚼そしゃくする。そしてむせ返る。ごほごほとその場で咳払いをして涙目になった目元を拭いてから、再び学校に向けて走り出す。

「おーい、二千翔！」

と後ろから突如として声がかけられた。二千翔は歩みを止めて振り向く。同じ高校の制服を着た男が、こちらに向かって走ってくる。自分はその男に見覚えがあった。

「おお、五十嵐！　お前も遅刻か？」

五十嵐敦也いがらしあつや、俺の中学時代からの親友であるこの男は高校になった今でも、悪友としてよくつるんでいる。たまたま受験した高校が自分と一緒に、一緒に受かってしまったのだ。さらには高校でクラスまでも同じになってしまい、ここまで来てしまったのならもう仕方がない、中学時代の悪友コンビ堂々の復活である。

細くあるかどうかの判断が付きにくい眉毛に、茶髪にされた髪の毛。ぎろつとした目付きで誰も寄せ付けようとしないうような、恐ろしい雰囲気を漂わせてもいる。そんな奴となぜ自分がつるんでいるか？　自分も敦也と似たような部類だからである。敦也に同じく細い眉

毛、髪の色こそ金髪で敦也とは違うものの、他の要素はほとんど敦也に近かった。喧嘩を売られればすぐに買出し、カツアゲなんか敦也と何度やったかも覚えていない。それでも少なからず高校生になつてからはお互いよく落ち着いたほうだ。

今ではクラスのお調子者として通っている。身長は敦也の方が自分より二センチ大きい。ちなみに自分の身長は百八十センチだ。

「ああそうだ。……なあ、もうゆっくり行かねえか？ どうせもう遅刻なんだし」

そんなことを考えていると自分のところまで辿り着いた敦也が、息を切らしながらそう口にする。自分は左手に身に付けていた腕時計を確認して、「そうだな」と返した。

それから二人並んで高校に向かつて歩き出す。途中で一般の社会人の連中が、自分達を訝<sup>いぶか</sup>しげな目で見つめてくるが、敦也が軽く睨み付けただけですぐに目を逸らしていく。

「今日の一時間目ってなんだったつけか？」

「ああ、……確か数学じゃなかったかな」

「うげ、マジかよ……。よかったな俺ら遅刻しといて」

敦也が言つて笑う。俺も、「確かにな」と返して笑う。だんだんと学校が見えてきた。俺らがいつも通っている、普段どりの学校。しかし何やらその様子がおかしい。二千翔は早足で学校に向かいだす。

「お、おいどうしたんだよ二千翔？」

敦也が後ろから声をかけてくるが気にせず走る。敦也も仕方なく学校に向けて走り出した。それから自分は学校の校門の前までやってきて、そこから見える教室をざっと眺めた。……二千翔の心の中で出来た違和感が、次第に現実のものとなつていく。

「どうしたってんだよ？ 二千翔！」

二千翔に追いついた敦也が軽く声を張り上げて質問する。二千翔は何も言わず、ただ学校の教室の方向に人差し指を向ける。敦也はその人差し指を辿っていき、やっとのことでその違和感に気付く。

「……一体どうしたってんだよ？」

敦也が独り言を呟く。

「分からない。……とりあえず、クラスに行こう」

二千翔が言って敦也も頷き、二人で教室に向かって歩き出す。いつも通り下駄箱のところまで行き、靴から上履きに履き替える。敦也も同様だ。それから二人で自分達のクラスである教室に向かって再び歩き出す。その途中に通る他のクラスを二人でチラッと見つめる。

……誰もいないのだ。

他のクラスにいるはずの友達。本来ならばこの時間中は静かに授業を行なっているはずなのに。教師の姿もなければ教室の明かりも消えているのだ。違うクラスもそれに同じくだ。これがさつき二千翔が感じた違和感だった。そして、

「やつぱり……」

二千翔と敦也は声を揃えて前を見つめる。そこには自分達のクラスがあるのだが、なぜか自分達のクラスからだけは明かりが点<sup>とも</sup>つていた。そして他のクラスとは違い、ざわざわとした生徒の話し声が聞こえてくる。二人は意を決してクラスの中へと飛び込んだ。

「あつ、二千翔さんに敦也さん！」

教室に入るや否や、一人の男子生徒が声をかけてくる。こいつは田<sup>た</sup>村<sup>むら</sup>……、下の名前が思い出せない。とにかく田村だ。ほっそりとした体つきをしていてゾンビのような奴だ。その田村が自分達二人を見て声を上げた。それで他の生徒達が反応する。

「あつ、二千翔君。おはよ〜」

「ああ、おはよう」

「ねえねえ敦也君。どうして他のクラスの人達、学校に来てないの？」

「知らねえよ！ こつちが聞きてえよ！」

クラスの女子生徒の数名（ちゃらちゃらした雰囲気）が、自分達

に話しかけてくる。それで二千翔は疑問をぶつける。

「え、みんなも他のクラスの事情知らないの？」

「うん。知らないよ、ねえ〜みんな〜？」

一人の女子生徒（さつき二千翔に挨拶した）である佐々木鈴が、長く伸びた前髪をいじりながらクラスメート全員に聞く。それに対してちらほらと反応が見られる。反応は、「うん」というものだ。このクラスの委員長である女子生徒の高橋優たかはしゆうが二千翔の元に歩み寄って、情報提供をしてくれる。

「私達が学校に来た時にはもう他のクラスの人達は誰もいなかったは……。もしかしたら、何らかの事情で今日休校なんじゃないかしら？」

「それだったら物凄く嬉しいけどな」

優の言葉にクラスの目立ちたがり屋である男子生徒、サイト（本名：斉藤倉之助さいとうくらのおすけ）が言った。自分と優は軽く苦笑する。敦也は腕を組んで今の現状を冷静に考えている。

「クラスみんなは全員来てるの？」

「うん一応。それで帰ろうかどうか話し合ってたら、二人が教室に入ってきたの」

「ああ、なるほど」

優の言葉を聞き、二千翔は納得する。この学校はだいたい一クラス約三十人の生徒がいて、このクラスの生徒達もそれに例外なくちょうど合わせて三十人だ。男子と女子が綺麗に十五、十五という形で分かれている。自分は出席番号の十四番であって、他の生徒達全員を紹介していくとこんな感じになる。

男子生徒、一番：田村（下の名前忘れた）。二番：佐藤祐樹。

三番：中沢大樹。四番：有坂俊平。五番：五十嵐敦也。六番：

中島浩平。七番：サイト（斉藤倉之助）。八番：新藤涉。九

番：柏木俊。十番：河原雅人。十一番：宮本宏章。十二番：

後藤剛。十三番：関口良太郎。十四番：坂崎二千翔。十五番：

わたなべさとし  
渡辺聡。

女子生徒、十六番：佐々木鈴。 十七番：杉田一穂。 十八番：高橋優。 十九番：土本裕子。 二十番：山田静江。 二十一番：茂野まゆみ。 二十二番：天道秋。 二十三番：大沢智恵。 二十四番：金子由香。 二十五番：麻美恭子。 二十六番：藤井恵梨。 二十七番：山崎貴子。 二十八番：高野真紀子。 二十九番：深井さゆり。 三十番：石川久恵。 の以上、三十名の生徒がこのクラスで一年を過ごすことになっている。みんな仲がいいといえば仲がいいし、それほど悪い奴らは集まっていないと思う。自分はそんなこのクラスで、上手くやっていけているほうだ。そんなことを考えていると腕を組んでいた敦也が、「よし」と言つて顔を上げた。全員の視線が敦也に向けられる。敦也は軽く咳払いをしてから口を開く。

「……この際だし、もう帰っちまうか」

その言葉にサイトと敦也の一番のクラス友達である新藤が賛成して立ち上がる。それを優がだめでしょ、と窘める。それで敦也もしぶしぶながらクラスで教師を待つことにした。別に教室を出て行つて他のクラスに顔を出しても、誰もいないのだから。二千翔も自分の席に座り、教師がクラスにやってくるのを待つ。後ろの席に座る河原が話しかけてきて振り向くと、時間つぶしにと漫画を貸してくれた。

「ありがとう」と言葉をかけてから本を受け取る。少年漫画だ。ペラペラと適当にページを開いて目を通していく。程なくして、廊下の方からこつこつと人の歩く音が聞こえてきた。

「先生、来たんじゃないの？」

河原が自分の後ろで言う。自分はとりあえず漫画を河原に返し、教室の二つある扉の片方を見つめる。

他の全員も廊下側の方に視線を合わせていく。

そしてこのクラスの担任である、小畑大輔が教室に入ってきた。そ

れに引き続いて、奇妙なお面を被った人が入ってくる。男か女かの判断が付きにくい、華奢な体つきをしていて、顔は言った通りお面で隠れている。……何だこいつ？

クラスの全員がそいつを見てざわめき出す。それを担任の小畑が、「静かにしろ！」と言って黙らせる。

それで辺りが沈黙したのを確認して、そのお面を被った人は喋りだした。

「へい！ レディース・アード・ジェントルマーン！」

口調からしてこいつはどうやら男だ。その男は上下に黒いジャージを着ていて、ジャージの上着のポケットに突っ込んでいた左手をひよいつと出して軽々しく挨拶をしてくる。担任は口を閉ざし、ただ黙ってその男を見つめている。クラスの全員もきょとした顔で、その男をまじまじと見つめる。もちろん自分もだ。

「えーっと……。……何から言えばいいかなー？」

男は頭をぼりぼりと掻きながら、しばらく考えてこう切り出した。

「……とりあえず、今日皆さんに集まっていたいたのは他でもありません。ちょっとゲームをやってもらうためです！」

男の発言にクラスの全員が頭に疑問符を浮かべて戸惑う。

「そのゲームってというのがね。……これがまたちょーっと興味深いルールなわけですよ」

男は言いながら携帯電話を取り出し、何事かを即座に告げる。すると遠くの方、たぶんこの学校の出入り口の方から大きな音が鳴り響いた。それから男は携帯をしまつて高らかにこう言った。

「今から皆さんにはですね。SCHOOL・GAMEという名の殺し合いゲームを、現実でやつてもらいまーす！」

……きつとクラスの中で俺が一番、間抜けな顔をして男の発言を聞いていたと思う。そしてこの後、自分は強く後悔することになる。

このまま遅刻を理由に学校をズル休みしておけばよかった、と。

## GAME・START!

「すみません。……あなたのおっしゃっている意味がよく分かりません」

クラス委員長である優が、得体の知れないその男に果敢に話しかける。それを気に目立ちたがり屋のサイト、田村（相変わらず下の名前が思い出せない）、敦也もその男に向かって声を荒げる。

「そうだそうだ！ 何が殺し合いだよ！？」

「お前、少し頭おかしーんじゃないか？」

「……………」

三人が三人、それぞれの自己主張を始める。敦也に至ってはただ黙って男を睨み付けている。それだけでも人を殺せそうな勢いだ。四人に一斉に言葉を投げ掛けられた男は、お面の中で苦笑しているのか頭をぱりぱりと掻く。それからぱつと軽くため息をつき、

「……やっぱり口だけじゃあ信じてもらえないよねえ」

と言ったかと思うと小畑ににじり寄る。それでなぜか小畑は焦ったように口を開き、「お、おい！ 話が違うじゃないか！」と言って教室の隅に後ずさっていく。男はそれに対して、「いや、ね？

ほらクラスの皆さんに信じてもらうためと思って」とじりじり担任に歩み寄っていく。

「ふ、ふざけるな！ わ、私は！」

「はい、皆さ〜ん！ ちゅ〜も〜く！」

担任の言葉をあつさりと遮り、男が左手を高らかに掲げる。それから急に取り繕ったような低い声音で。

「これがゲームを信じてもらう証拠だ」

と言ってから上着の黒いジャージに突っ込まれ続けていた右手を、担任に向けて抜き出した。直後にぱん、という乾いた音が教室中に鳴り響いた。二千翔は何が起こったのか理解できない。ただ担任の小畑の額に何かがめり込み、それが後頭部から飛び出していった。

その後、担任の体がゆっくりとスローモーションのように倒れていく。そして自分の視線に、赤い色をしたものが同時に飛び込んでくる。そこで二千翔はやつとのこと、担任が男の右手に持つ『拳銃』で撃ち殺されたのだと分かる。女子生徒の一穂さんや智恵さんの悲鳴が上がり、自分の隣に座っている有坂がショックで嘔吐おうとした。自分も倒れてピクリとも動かない担任を見て、胸に込み上げてくるものがあるが必死に抑える。男は悠々《ゆうゆう》とした態度で拳銃をまた上着の黒ジャージのポケットにしまい、「これで分かっただろ？」と言わんばかりの顔をしている。質問を投げ掛けた四人も啞然あぜんとしている。あの敦也でさえも、だ。

「……それじゃあ、はい。とりあえずお前ら動くなよ？ 少しでも動いたら……」

そこで男は言葉を区切り、死んでいる担任にゆっくりと顔を向ける。それだけで何を伝えたいのかが充分に理解できる。クラスの全員がそれを悟り、口を閉ざして黙っている。微かに女子生徒のすすり泣く声が聞こえてくるくらいだ。男がよろしいといった風に話の続きを再開する。

「では、え〜つとですね。……これから皆さんにやってもらうゲームのルール説明をしていきます。皆さんよく聞いていてくださいね？」

誰も男の言葉に返事を返さない。いや、恐怖で返せないのだ。男は気にせず続きを語っていく。

「とりあえず真っ先に言っておくことは、今ここで起きているもしくは起きることは一切に犯罪になることはありません！ つまりそこにいる君が！」

男はそう言っただけで女生徒の佐々木鈴を指差し、それから適当に違う女生徒を何人も指差して言う。

「そこにいる子やそこにいる子！ 誰をどう殺しても犯罪にはならないので〜す！」

男に指差された女生徒は、「ひっ……！」と軽く悲鳴を上げて身を

縮める。鈴に至ってはふんといった感じで、男の話を興味深そうに聞いている。

「そ・し・て……ただ殺し合いをするだけじゃあ、皆さんきつと乗り気にはなってくれないと私は思うので」

そこで男は黒ジャージのファスナーに左手を掛ける。そしてそれを勢いよく下ろした。

「こんなものをご用意しましたー！」

そして男の黒ジャージの懐ふところから出てきたのは、金。

それも大量に福沢諭吉の絵がプリントされた札束が何百枚も何千枚も！ クラスの全員は呆気にとられてその光景を眺めている。男は一頻ひつきりクラスの全員にそれを見せ付けた後で、こう切り出す。

「これは皆さん知つての通り、お金です。全部で合計三千万はありまゝす！」

それを聞いた全員がその札束を見つめ、生唾を飲み込む。自分も漫画やテレビドラマなどで札束を目にすることは多々あったが、実際に現実でそれを見たのは生まれて初めてである。

「この札束 - あなた自身の命」誰かが百万円ゲット！」

男が唐突にそう叫ぶ。もちろん意味が分からない。全員、男の続きの言葉を待つ。それから男はすぐにクラスの全員に向かって、衝撃的な一言を告げた。

「……だからつまり、この札束が欲しかったら殺し合いをすればいいんです！ 簡単でしょう？ 誰かが誰かを一人殺せば、その誰かに百万円が手渡される仕組み。というわけですよ！」

クラスに今までで、一番の深い沈黙が流れる。……人を一人殺せば、その殺した人に百万円が手渡される？ ふざけるな！ そんなの許されるはずがない。男はそれから最後にというように全てを口早に告げていく。

「制限時間は明日の夕方午後五時半まで！ エリアはこの学校の中だつたらどこへ行つても構いません！ まあ、ゲームが終わるまで外に出ることは不可能ですので。ご了承くださいね？ で最後に

もし人を殺してお金が欲しかったら、この学校の職員室に行ってください。私がそちらに移動していますので殺した人間の首を手渡せば、私がそれと引き換えに百万円をお渡しいたします」

クラスの全員が呆氣に取られている中、男は最後にもう一度、低い取り繕った声でこう言った。

「尚、誰も殺し合いをせずに一時間が経過した場合。学校中に毒ガスが撒かれるのでご注意ください。まあ私はガスマスクしますけど、他のクラスの皆さんは、……ねえ？」

と冷やかな口調でクラスの全員を脅し、両手でパンパン、と二回ほど手を鳴らしてから教室の扉まで歩み寄っていき、教室の扉を開けてから振り返る。そして男はクラス全員を見つめて最後の最後に、「それでは、GAME・START!」

とだけ告げてどこかに（たぶん職員室だろう）行ってしまった。後に残された自分達はどうしてよいか分からず、しばらくの間は全員黙っていた。しかしすぐにクラス委員長が自分の席から立ち上がり、「とりあえずみんなで玄関に行ってみましょ？」ということ移動が開始された。自分は担任が死んだショックで青い顔になっている有坂を、河原と共に介抱しながら教室を出る。

それからクラスの全員で玄関まで行ってみると、そこにはありえない光景が広がっていた。

「何これ、どういうこと？」

女生徒の恭子さんが呟いて他の全員も必死に目の前のことについて考える。そこは本来、外に出るための玄関であり扉があるはずなのである。しかし自分達の目の前には玄関はなく、変わりに玄関全体を覆うような大きな壁が立ちふさがっていた。二千翔はその大きな壁に近づき手を触れる。壁は何か硬い素材で出来ているようで、押しても叩いてもびくともしない。仕方なく玄関から外に出ることを二千翔やクラスの全員は諦める。と、今度は敦也が全員に声をかける。

「玄関が無理なら窓は？ 窓ならどうにか」「はいはい皆さん

！」

敦也の言葉を遮るように、職員室から学校の内部全体に向けて放送が流れ出す。放送で喋っているのは他でもなくあの男だ。

「そういえば言い忘れたんだけどね？」この学校から出ようと考えても無駄だぞ。玄関は封鎖してるし、学校の窓全体にも電流が走ってるから触ったら感電死だぞ。」

敦也が放送を聞いて舌打ちし自分やクラスのみんなは戸惑い、慌てている。

「……何だっというんだよ？ ……昨日まで、昨日までは普通の学校だったのに！ 一体何が起きたって言うんだよ！？」

サイトが叫び、他の生徒達からも口々に言葉が飛び交う。

「そ、そうよ！ 斉藤君の言う通りよ！ 昨日まで他のクラスの子も普通に学校来てたのに、どうして今日になって急に！？」

「もしかして他のクラスの子達は今日の事、本当は知ってたんじゃないの！？」

「……じゃあ私達これからどうすればいいの！？」

「なあ新藤、……あの変な奴が言ってたことマジなのかな？」

「ああ、たぶんそうだよ……。となると今から約一時間後に毒ガスか」

「ちよっ……ちよつとみんな一旦落ち着いて！」

クラス委員長である優の言葉で、ざわついていたクラスの全員が口をつむぐ。優はそれから額に手を当てて考え、「……ひとまず、今の時間は？ 二千翔君」と自分に聞いてきた。自分は右手にしている腕時計に目をやって、「えつと……九時四十分」と答える。

「あのお面男がゲーム開始って言ったのが、今からだいたい十分前だから……。毒ガスまでのタイムリミットは十時半ね。それまでにどうにか学校から抜け出さなきゃ！」

優かのそれに対して、すぐに敦也が返事をする。

「……それならあいつの裏をかいてやろう！ 窓に電流が流れてるってんなら、手を触れずに窓を壊せばいいんだ！」

優が、「どうやって？」と敦也に聞き返す。敦也はにっと笑みを浮かべながら静かにこう答えた。

「決まってる。……何か物をぶつけてやればいいんだ！」

それから二千翔と優は、敦也の指示で教室から金属バットや椅子などをそれぞれ一つずつ持ってきた。椅子は教室にあった誰かの席のもので、金属バットは野球部に所属している河原のものだ。敦也はとりあえず金属バットを掴み、一階の玄関からすぐ近くにある窓の前に立つ。他のクラスのみんなも敦也を見守る。自分や優も祈るようにして敦也を見つめる。敦也はふっと軽く力を抜くように息を漏らすとぎゅっと唇を噛み締め、大声を上げながら金属バットを窓に投げ付けた。金属バットが敦也の手から離れ窓に勢いよくぶつかる。そして金属バット独特のきんつという鈍い音が響き、金属バットは跳ね返るように敦也に向けて戻ってきた。敦也はそれをすぐに横に飛び退いてかわす。

「なっ……！？ 何で窓ガラス割れねえんだよ！」

敦也が悔しそうに叫び、二千翔の持ってきた椅子を手取る。それをまた同じように敦也は窓に向けて投げ付けた。……結果はさっきと同様だった。敦也は地団駄を踏みながら、窓をきつく睨みつける。

「……くそっ！」

「そんな、窓ガラスを割ることも出来ないなんて……」

優が言って他の全員も落胆した表情を見せる。二千翔は窓を見つめ、どうして物が跳ね返されるのか考えるが全く理解できない。……とにかく今分かりきっていることは、この学校から自分達が出ることには不可能に近いということだけだ。そして後に残された道は、二つだけ。

毒ガスで死ぬか。ここにいるクラスメイトと殺しあって生き残るか。

どちらにしろそれは究極の選択だった。と、

「いやあああああああああああああ！」

「うわあああああああ！」

誰がそう叫んだのかは二千翔には分からなかったが、クラスの中の何人かが学校から出ることはもう出来ないと判断したらしく、学校内のどこかに走っていつてしまふ。それが合図になったように他の全員も一人、また一人とどこかへ行ってしまう。それは果たして他の脱出法を探すためのなのか、はたまた……。

二千翔は首を横にぶんぶん振って悪い考えを取り除く。大丈夫、みんなこのゲームには参加なんてしない、みんなきつと学校を出るために必死になってるだけだ！と自分に何度も言いつて聞かせる。そうして何分の時が過ぎただろうか……。二千翔ははつとして腕時計に目をやる。九時五十五分、毒ガスまで後三十五分しかない。早く脱出の方法を見つけないと！

二千翔は周囲に視線をやる。あれからクラスの全員は、ほとんど散<sup>ち</sup>り散りになつてどこかへ行つてしまい、この場に残っていたのは自分も合わせてたったの三人だった。

「さて、仕方ねえな。……他の方法考えないと！」と敦也。

「そうね。じゃあ敦也君に二千翔君！とりあえず今は三人で行動しましろう？」と優。

「……そうだな。よし、敦也！ 優さん！ そうと決まれば急ごう！」

そうして三人は他のクラスの全員から、少し遅れてやっと行動を開始した。

……一方そのころ、学校の職員室の扉の前。一人の女生徒が扉をすつと開いた。各教師の机が立ち並び、学校の外が眺められる窓。もちろんその窓も今は電流が走っていて大変に危険な状態だ。女生徒は慣れた足取りで職員室の中に入っていく、きよろきよろと辺りを見回す。すると職員室に入つてすぐのところにある放送室から男が出てきた。男は女生徒の姿を確認すると、「おやおや？ どうかしましたか？」と気さくに話しかける。女生徒はそんな男の目を

見つめながら、癖くせなのか長く伸びた前髪をいじりながら口を開いた。  
「ねえ、確かさ。……人を一人殺してその首をあなたに渡せば百万円貰えるのよね？」

女生徒は間延びした喋り方の中に、何か人を怖がらせるような殺気のようなものを帯びている。両耳に付いている可愛い形かたちのピアスに、茶髪のロングヘアというその風貌ふうぼうが彼女をどのような人間なのかをも表している。男はそんな女生徒に、「はい、そうです！一人の首につき百万円で！」と促してから、「もしかして、やる気ですか？」と付け加える。

女生徒はそれについては口を開かず、ただいじっていた前髪から指を離れた。そして踵かかとを返して職員室の出口へと向かい、出口の扉に手をかけたところで女生徒は男の方に向き直って言った。

「とりあえず、一度に三つくらい首持ってきますので！。その時はよろしくお願いしま〜す」

女生徒は、佐々木鈴は抑揚よくようのない間延びした声音で男にそう告げると、につこりと笑って職員室を後にした。

## GAME・ONE（前書き）

今回の内容には一部、レズ的な要素が含まれます。  
どうかご了承ください。

## GAME・ONE

人気の感じられない理科室。空の薬品の瓶<sup>びん</sup>が何本も棚に置かれてあり、隅には人体模型とガイコツが仲良く一緒に並んでいる。そんな不気味な雰囲気漂っている理科室の、生徒が授業を受けるためにいくつも設置された内の一箇所の長机の下に、女子十七番の生徒である杉田一穂は身を隠していた。

ここならそんなに人も来ないだろうし、もう学校から出るのが不可能で毒ガスを浴びて死ぬというのならば、せめて最後まで自分の大好きな場所で死にたかった。

理科室は自分がまだ幼かった小学校の時から、置かれている数々の不思議な物に興味を引かれ、気が付けば理科室で授業を行なうのが毎日自分の中で楽しみになっていた。そんな思いがいっぱい詰まっている理科室で死ねるのなら、自分は本望だと一穂は残り時間をばーっとして眺める。

毒ガスが撒かれるのはゲームというのが始まってから一時間後と、あのお面を被った男が言っていた。そして今の時刻は十時二十九分。一穂はゆっくりと目を閉じ、理科室の長机の下でふるふると小刻みに震える。……やがて、理科室に掛けられている時計の秒針がとうとう十時半を指し示した。

一穂はぎゅっと唇を噛み締め、毒ガスが撒かれるのを不安そうに待つ。しかしどうしたことが、いつまで経っても毒ガスは撒かれてこない。そしてついには時計の秒針が十時三十一分を示した。

一穂はきよとした顔で長机の中から這<sup>は</sup>い出てきて、「どうして？」と呟く。あの男が言っていたことは嘘だったのかとも同時に考えたが、それはないだろうと一穂は心の中で強く否定した。

なぜなら担任の教師を目の前で射殺したような人間だ。それが時間になっても誰も死ななかつたら、それこそ間違はなく毒ガスを撒いているだろう。……そこで一穂ははっとする。誰も死ななかつたら、

……。

誰も死ななかつたらあの男は間違いなく今、毒ガスを撒いていた。

一穂はその場で身震いする。まさか？ いやそんなはずは……。その時だった、再び学校中に放送が流れ出した。一穂は放送が流れてくるスピーカーに目をやる。スピーカーからはまた、あの男の声が響き渡った。そして一穂が今まさに考えていた、……もつとも最悪な言葉を付けて男は喋りだした。

「皆さん。おめでとうございます！ 一人の生徒さんの果敢な活躍によって、一度目の毒ガスを回避することが出来ましたねー。引き続きゲームを頑張ってください。一時間後にまた放送が入りますのでよろしくね？」……あつ、そうだ最後に」

一穂は息を呑む、男は最後に忘れていたというように抑揚のない声でこう告げた。

「女子二十一番、茂野まゆみ。死亡です」

ぱつとスピーカーから放送が途切れる。一穂はしばらくの間、自分の耳に何という言葉が届いたのか理解できずにその場で立ち尽くしていた。……そして時間は、今から約二十分前に巻き戻っていく。

時刻はだいたい十時十一分。

女子二十番の生徒である山田静江は、女子二十一番の生徒である茂野まゆみと行動を共にしていた。

狐目で人を寄せ付けないようなオーラを放ち、唇も頑かたくなに閉ざされていて誰とも話さないような態度。黒髪で少しボサボサした感じのロングヘアー、身長は女子の平均よりやや大きく百七十五センチもある静江。そんな彼女とは対照的に、まゆみは黒長い艶つやのある髪の毛を綺麗にゴムでポニーテールにしている、目元も口元も静江とは違ってどこか優しい友好的な印象が見受けられてくる。そして肌も全く乾燥しておらず、逆にどこか瑞々《みずみず》しくもちっとした

感じた。それも静江とは異なっている。静江に至っては例で取り上げるなら干からびた魚、要するに言うとか干物のような乾燥肌をしている。

そんなにまでお互いの容姿が対照的であるこの二人が、何故このような状況下に陥っても一緒に行動を共にしているかというところ、それには深い理由があった。

「ごめんね静江ちゃん……。最後まで、私と一緒にいてくれてありがとう」

「何馬鹿なこと言ってるのよ？ まゆみを守るのが、この私の使命みたいなものでしょうが！」

静江はまゆみの震えている手をしっかりと握る。まゆみは一瞬はつとした表情をするものの、にこつとすぐに笑みを見せて静江の手をしっかりと握り返す。

そう、……。この二人はただの仲良しではないのだ。それよりも一回り、いや二回りも上な関係にある。そのきっかけは小さな出来事から始まった。あれは、まだ静江がクラスに馴染めておらず机に突っ伏して不貞寝ふてねをしていた頃のことだ。

突然、本当に突然に彼女は話しかけてきたのだ。「静江ちゃん、だっけ？ えつと隣の席の……。茂野まゆみです。あの、よろしくね？」と、こんな感じで。

最初の頃は何かこいつ？ と思って無視していたものの、それから何日も何日も彼女は自分に話しかけ続けてきた。そしてついに我慢の限界がきた自分は、ある日のこと彼女に本気で怒った。「あのさ、何なのお前？ 悪いんだけどこっちは迷惑してるの！ 用がないんだったら気安く話しかけてこないでくれる？」そんな具合に、きつい言葉を彼女に浴びせた。自分でもこれは言いすぎたなと反省はしたが、言ってしまったからには仕方がないなと思い返し、その場から逃げるように早足で教室を出ようとした。……。まさにその時だった。

「お話なら、……。お話ならあります！」

とても彼女の口から出たとは思えない、大きくはつきりした声が自分の耳に響いた。驚いて振り向くと、彼女は涙を流しながら胸元に手を当てて立っていた。クラスメートの視線が、自分と彼女に突き刺さる。それでも彼女は気にせずもう一度、「お話なら、あります……」と言って口元をもにゆもにゆし始めた。自分は半ば呆れて彼女に何？ と目を向ける。それで決心したかのように彼女は大声で叫んだ。

「わ、私は……私は！ 静江ちゃんが大好きです！ よ、よかったら付き合ってください！」

……はっ？ ……。

それからどうなっていたかは、二人の様子を見れば一目瞭然だ。いちもくりようぜんその当時のまゆみの自分に対しての発言は、一時クラス中で壮大に問題となりかけたのだが二千翔や敦也がクラスの全員をなだめてくれたおかげで、今では自分達二人のことを馬鹿にする者はクラスでは誰一人としていない。……むしろ応援されているぐらいだ。心の中で軽く苦笑が漏れる。

そんな時だった、毒ガスを撒かれる前に二人でどうにか脱出を試みようとして学校の渡り廊下を歩いてると、少し先の方にある階段から人影が見えた。

自分は無意識にまゆみから手を離し、まゆみを庇うように前に躍り出た。かはまゆみは自分の背中後ろに隠れるように身を縮める。

階段から歩いてその姿を現したのは佐々木鈴だった。鈴は自分達二人に気付くと、「あゝ、静江とまゆみがいるー」と間の抜けたような声を出しながらすつと自分達のところまで歩み寄ってきた。自分らはほっと胸を撫で下ろしてから心の中で「鈴なら……一緒に行動しても大丈夫よねきっと」と思い、自分の後ろに隠れていたまゆみを安心させるように言葉をかける。

「ほら……まゆみ。鈴だよ、だから安心しな」

「う、うん。よかった」

佐々木鈴と自分は中学生の頃からの誼よしみが続いていて、まゆみを別物

として自分の中では一番と呼べる親友だ。鈴はこんな状況にも関わらず、相変わらずのぼわーとした雰囲気たたずで佇んでいる。ある意味さすがだな、と自分は感心する。するとその鈴が唐突に口を開いた。「ね〜ね〜、さっきね？ 家庭科室にふらっで行ってみたんだけどさー。……そしたら脱出経路、見つけちゃったんだ〜」

鈴の言葉の意味を理解するのに、自分は少々時間がかった。その代わりにまゆみが鈴に返事を返してくれた。

「じゃあ、……じゃあこの学校から脱出できるの？」

「うん、たぶんね〜」

そこでやつとのことで自分も会話に参加する。

「で、でもちよつと待ってよ？ その脱出経路ってあの男の罠とかじゃない、よね？」

脳裏に担任のことが鮮明に蘇り、心配になって鈴に聞いてみる。鈴にしては珍しく、即座に首を横に振ってそれに答えた。

「いや、たぶんそんなじゃないと思うなー。あれはきっと大丈夫なはず」

鈴がきつちりと言いつたので、自分もまゆみも安心してその脱出経路があるところに移動することにした。三人で渡り廊下から歩き出して階段を下り、一階にある家庭科室へとほんの少し急ぎ足で向かっていく。そこで自分はそういえばと鈴に尋ねる。

「あつ、そうだ鈴。……その脱出経路ってどんな感じなの？」

「……………」

「鈴？ どうしたの？」

「……ごめ〜ん、今は説明してる暇はないんだ〜。毒ガスが撒かれるって時間まで、もう十分もないし」

鈴にそう言われて、自分は慌てて持ち歩いていた携帯を開く。そして今の時刻が十時十八分だと確認して、さらに自分は慌てた。

「ちよつ、やばいよ鈴！ 急がなくちゃ！」

「うん。そ〜だねー」

三人は家庭科室までの道のりを、早足から走るに切り替えて移動す

る。廊下に三人の女子の走る音が響く。そしてついに三人の目の前に家庭科室が見えた。時刻は……大丈夫、まだ一分しか経っていない。よし、これなら間に合う！ まゆみと何とか無事に脱出できる！ 静江は心の中でガツポーズを取ると、再びまゆみの手を握った。今度は、まゆみも落ち着いてその手を握り返してくれた。

そうしていよいよ鈴の言っていた家庭科室の扉の前まで来ることが出来た。自分は大きく深呼吸を一つしてから、まゆみと鈴の三人で家庭科室の扉を開け放った。

家庭科室の中は至って平凡で、白い料理用の机がいくつかと生徒のための椅子が並べられているだけだ。他に目に付くものといえば調理のために使われる包丁が、机の中央に一本ずつ置かれている。…なぜ一本ずつ置かれているのだろうか？ 普段なら片付けられているはずなのに。その答えは、割かしすぐに分かったのだった。なぜなら、

「……ねえ？ 静江ちゃん、まゆみちゃん」

鈴が自分達二人より一步、先頭に歩み出る。そして話を続ける。

「何でさ、普段なら置いてない包丁が机の上に一本ずつ置かれていると思う？ それとー、……もう一つ」

自分の中で嫌な予感が立ち込めてくる。鈴は自分達二人に振り向くと、にこつと笑った。笑ってから、隠し持っていた包丁を取り出した。

「……どうしてー、私が包丁を一本持っているのでしょうーうか？」

自分の額に冷や汗が流れ、即座に手を繋いでいたまゆみは無造作に突き飛ばす。「きゃっ！」と軽く悲鳴を上げて、まゆみが家庭科室の床に尻餅をつく。その間に、鈴は包丁を自分に向けて突き出してきていた。自分はギリギリのところまでそれを避ける。それでも頼にかすつたらしく、血がフーッと流れ落ちた。

慌てて体勢を立て直して、鈴と再び真正面に対峙する<sup>たいじ</sup>。

「り、鈴！？ ちょっと待ってよ！ 一体何考えてるの！」

「うつ、るさいなー。いいから黙ってさっさと私に首ちよくだいよ」

鈴はそう言うが早い。再び自分に向かって襲い掛かってきた。中学の頃からの友達付き合いで、彼女の目が完全に据<sup>す</sup>わっているのが理解できた。……どうやら本気のようなのだ。自分は鈴が全力で振るってくる包丁を、必死の思いで何とか受け止めた。鈴はそれを振りほどこうと大暴れしだす。自分は受け止めた彼女の手をさらに必死で掴み続けながら、言葉を発す。

「や、やめてったら！……どうしちゃったのよ鈴！？本当に！」

「何がー？私は別にいつも通りだよー」

「違う！普段の鈴は絶対にこんな事しない！ねえ目を覚ましてよ鈴！」

彼女の抵抗に抵抗を重ねながら、どうにか鈴を止めようと試みる。

しかし、……彼女は自分の目をしっかりと見ながらたった一言こう告げた。

「はあ？あんた、もしかして本気で私のこと友達だとも思ってたの？」

「えっ……？」

彼女の手を押さえていた自分の手の力が一瞬、緩<sup>ゆる</sup>んだ。それを見逃さず鈴はすぐに自分から手を振りほどくと後ろへ二歩三歩、速やかに後退する。それを見つめている自分はいまだに放心状態だ。そして彼女は荒い息を少々たてながら、自分に向けて嫌な笑みを浮かべた。そして言う。

「……ぷっ、あっははは！馬っ鹿みたいねあんた。私はあんたのことなんか、中学の頃から友達だとも思ってたまんよーだ」

「う、……嘘。ねえそれって嘘でしょ？嘘だよね？……嘘って言うてよ鈴！」

自分の言葉に彼女は気を悪くしたように、今度は怒氣の孕<sup>はら</sup>んだような顔で静かに言った。

「人の名前、気安く呼ばないでくれる？あんたに名前叫ばれると虫唾<sup>むしず</sup>が走るんだよねー」

それから彼女は家庭科室の時計をちら見して、すぐに自分に焦点を

戻す。その目は怖いくらいに冷めていて、まるで自分のことを虫けらかもしれないと感じて見ている。さらに彼女は動揺する自分に対してどんどん追い討ちをかけるような態度で言った。

「しかもさー、そんなあんたが何？ 彼氏が出来たのかと思ったらまさかこんな豚と付き合ってるなんて。……ほんと、似合いすぎて面白くてしょうがないよ！」

「なっ！」

自分はきつと彼女を睨みつけた。それに負けじと彼女もきつく自分を睨んでくる。この際、もう自分のことを言われるのは構わなかった。鈴が自分のことを本当は嫌いだったのなら、それならば勝手に縁を切ってくれた方がいい。しかしそれでも、まゆみのことをひどく言うのだけは自分は許せなかった。まゆみは自分にとって、何よりも大切な存在なのだ。それを豚呼ばわりされては黙っている訳にはいかない。

「……許さない。絶対、許さない！」

「あつはは〜。気色悪いビッチが何かほざいてるー。ウザいから黙れよ」

「……………っ。……………！！」

自分は飛び掛るようにして鈴の顔に拳を叩きつけようと、片手をぎゅっと力強く握る。だがそれよりも一足早く彼女は、事の成り行きを心配そうに見守っていたまゆみをひっ捕らえた。そのまま彼女はまゆみの背後に回りこむと、首元にすつと包丁を突きつけた。自分の動きがそれでぴたりと止まる。

まゆみは自身の首元に突きつけられた包丁に目線をやるようにして、それからそれを自分に向けてくる。その一連の動作は、まるで弱い小動物が何かのようだ。自分は心の中で舌打ちする。これでは彼女に掴みかかるどころか、下手をしたらまゆみが殺されてしまう。

「くっ……………そ……………！」

自分は拳をわなわなと震わせながら、その場に立ちすくむしかなか

った。それを見た鈴は勝ち誇ったように含み笑いを漏らし、それから淡々と喋りだす。

「まあそう怒らないでよ。お楽しみは、まだまだこれからなんだからさ」

そう言ってから鈴は、まゆみを盾にするようにして徐々に徐々に自分に迫<sup>せま</sup>ってくる。自分はまゆみに何かあつたらと思ひ、手が出せずに後ずさるしかない。それでもその距離は次第に縮まっていき、ついに自分の目の前まで来たかと思えば彼女は突然、まゆみの後ろから自分に向かって飛び出してきた。

さすがにそれには自分の体も反応しきれずに、とうとう鈴の持っていた包丁が、自分の太股<sup>ふともも</sup>に深々と突き刺さった。

「あつ！ いつ……！」

自分はそのあまりの痛みに、なすすべなく床に倒れ伏した。それから鈴は自分に刺した包丁を抜き取り、今度はまゆみに焦点を合わせた。自分は床に倒れたまま必死な思いで叫ぶ。

「ま、待つて！ ……お願い。……まゆみだけは」

「はあ？ 誰があんたの意見なんか聞くかよ。あんたもどうせここで死ぬんだから、この子の最後まで見取つてあげたら？」

鈴の言葉に動けずに固まつているまゆみは激しく動揺し、「ひぐつ……！」と声にならない嗚咽<sup>おえつ</sup>を漏らした。自分は額を床にこすり付けるようにして、彼女に懇願<sup>こんがん</sup>する。

「お、お願いします。……まゆみを、まゆみを殺さないで！」

それを聞いた鈴は盛大に嫌な顔をして倒れている自分に振り返り、それから何か意地の悪い考えを浮かべたようにこう言った。

「……だめだなー。もっと誠意を込めて私にお願いして見せろよ」  
そう言われ、自分はプライドも何もかもかなぐり捨てて叫ぶ。

「お願いします！ 鈴……様……。まゆみを、殺さないでください！」

「何々？ 今あんた私のこともしかして鈴様って言った？ ……」

…あはは、いいね！。最高の響きだよ」

自分はそれから、痛みで悲鳴を上げている足腰を押さえ込んで懇願し続けた。鈴様と、もう何度叫んだかも分からない。自分は屈辱と悔しさから、ぼたぼたと目元から涙が溢れ出していた。鈴はそれを目敏く確認して、愉快そうにくすくすと笑う。そして、それから彼女はまゆみを自分の目の前に突き出してきた。先ほどと同じく、首元には包丁が突きつけられている。

「……静江……ちゃん……」

「……っ、……まゆみ！」

まゆみが包丁を突きつけられた状態で、そっと自分に手を差し出してくる。自分はその手にすがるように自身の手を伸ばしていく。後もう少しで二人の手が触れ合う直前、包丁を突きつけていた鈴がまゆみと一緒に後ろに一步後退した。それで二人の距離はまた離される。自分は憎らしげに鈴の顔を睨むようにして見つめる。そんな自分の態度に対して鈴はにつこりと笑い、

「あんたの誠意と頑張り、……認めてあげるよ」

と言ってまゆみから手を離れた。自分はそれを見て、やった！とまゆみに再び手を伸ばす。まゆみもそれを見て、ひよこひよこ恐怖で千鳥足ながらも自分のところへ向かって歩き出し、手を伸ばしてきた。

……そこでもう一度、鈴が口を開いた。口端を吊り上げて嫌な笑みを浮かべながら。

「誠意と頑張りだけは、ね？」

そして自分とまゆみの手が触れ合うまたほんの少し前に、彼女の持つ包丁が勢いよくまゆみの首に突き刺された。まゆみの伸ばしていた手がぴたっと止まり、ふるふると痙攣する。それからすぐにその手は力をなくし、自分の目の前でだらりと力をなくした。鈴はそんなのお構いなしに突き刺した包丁をしっかりと掴み、それからまゆみの髪の毛も同時に掴むと、力任せにごりごりと横へ横へ包丁を動かしていく。自分は呆気を取られたように、ただそれを見ていることしか出来なかった。まゆみは目を見開いて、自分の身に一体何が

起きているのか分からない、といった表情をしている。だがその時すでにまゆみは事切れいていた。

そして自分の意識がはとなった頃には、まゆみの首と体は鈴によつて綺麗に切り離されていた。鈴の手に握り掴まれたまゆみの首からは、だばだばと血が止め処なく溢れ出している。それは無論、床に力なく横たわったまゆみの体も同様にだ。

「あつ……あつ、そんな……まゆみが……」

「あつははははは！ どお？ 大切な人を目の前で奪われる気分は？」

そう言つてから鈴は再び高らかに笑つた。自分は首のなくなつた体だけのまゆみにそつと手を触れ、泣きながら手繰り寄せたまゆみしめる。それを見た鈴はさらに気分をよくして高らかに笑い続ける。とそこで鈴はまた時計に目をやって舌打ちする。

「……ちつ。何よ、せつかく面白くなつてきたのに！ もうこんな時間！？ 早くしないと毒ガス撒かれちゃう！ 首持つてかなきゃ」

鈴はステップを踏むように軽やかな足取りで、まゆみの首を持ち家庭科室を出ていこうとする。自分はただその背中を怒りや悔しさといった、その他様々な気持ちを込めて睨みつける。それを感じ取つたように鈴は自分の方へ振り向き、「そうそう」と言つてから自分にこう告げた。

「あんたはまだ殺さないでいてやるよ。さっきの誠意を見せてもらったからね……。それでもまた死にたいって言つんなら午後の一時、この学校の屋上で待つてあげるわ。もちろん、来るか来ないかはあんたの自由よ？ もっとも来たところでどうなるかは、結果は目に見えてるけどね。あつははははははは！」

そして鈴は家庭科室の扉を開けると、どこかに向かい歩き去つていった。自分はまゆみの体を強く抱き寄せながら、足の痛みに耐え、ただただ叫ぶことしか今は出来なかった。

女子二十一番、茂野まゆみ：刺殺。

その後、職員室に午前十時半ギリギリでその首を届けた佐々木鈴：  
百万円ゲット。

残り生徒数、二十九名。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3728ba/>

---

SCHOOL・GAME

2012年1月13日21時51分発行